

# 話しにくさの自覚に関する アンケート調査

北村達也

甲南大学知能情報学部

# 研究の背景と目的

- ❖ コミュニケーション障害を持つ人は人口のおよそ5 %程度存在 (刈安, 城本, 2012)
- ❖ 話しにくさの自覚に関するアンケート (立川, 2013)
  - 日常的に話しにくさを自覚 13名/151名
  - どちらかといえば自覚 63名/151名
- ❖ 発話運動も随意運動の一種であるから不得意な人は存在するはず
- ❖ より大きい規模でアンケート調査を実施

# 対象者

- ❖ 甲南大学(兵庫県, 神戸市)の学部生505名
- ❖ 年齢：平均19.0歳, 標準偏差1.1歳
- ❖ 学部
  - 文系学部(経済, 経営, 文学, 法学) 246名
  - 理系学部(知能情報, 理工) 259名

# 質問項目

1. 学部と年齢
2. 日頃話しにくさ(発話運動がうまくいかない感じ)を感じているか
  - 感じない, まれに感じる, ときどき感じる, 頻繁に感じる
  - 緊張によって上手く話せなくなることは本調査の対象外であることを強調
3. 聞き間違えられたり, 聞き直されたりすることが他人より多いと思うか
  - はい/いいえ
4. 話しにくさを感じる場面や発話内容, 話しにくさの感覚

2014/04/16 版

## 「話しにくさ」に関する無記名アンケート

甲南大学知能情報学部 北村達也

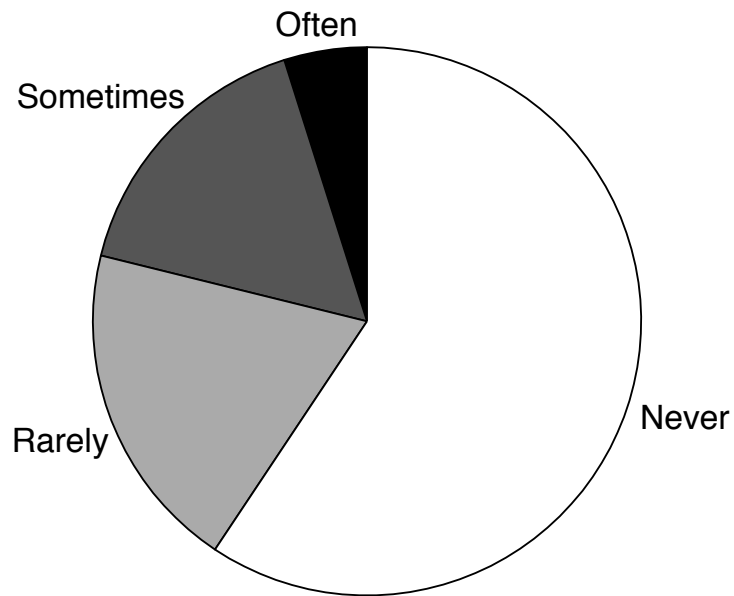
私たちが日頃何気なく行っている「話す」という行為も運動の一種です。従って、走るのが上手な人とそうでない人、手先が器用な人とそうでない人がいるように、発話運動にも得手不得手があります。このアンケートでは、発話運動が不得意な人、つまり「話しにくさ」を感じる人が日頃どのような点に不自由を感じているのかを調査するものです。

なお、当研究室では「話しにくさ」とその改善法に関する研究を開始します。「話しにくさ」を感じていらっしゃる方のうち研究にご協力いただける方は、ぜひご連絡ください。

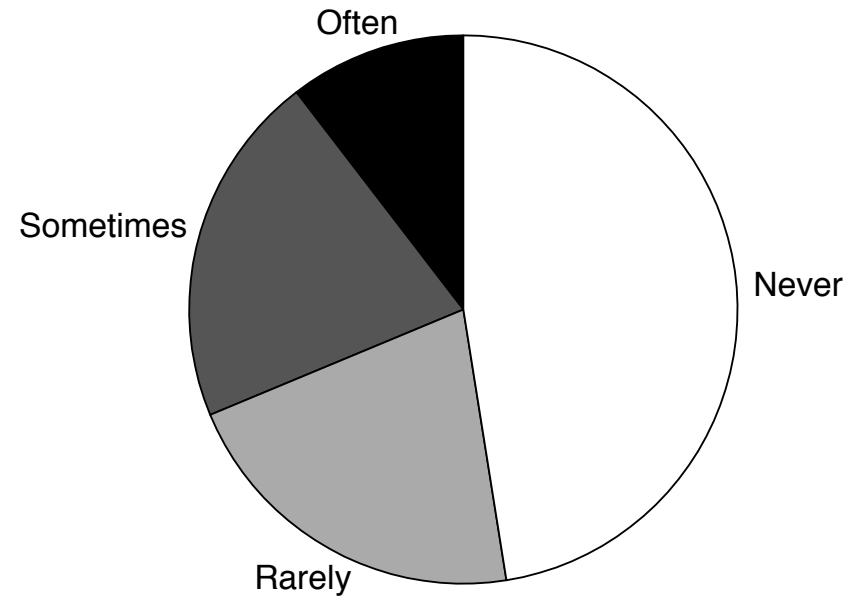
# 手続き

- ❖ 講義中に実施
- ❖ 自由意思によって協力してもらうこと、  
無記名であることを説明した後、アンケート用紙を配布

# 質問2の結果



(a) 文系学生

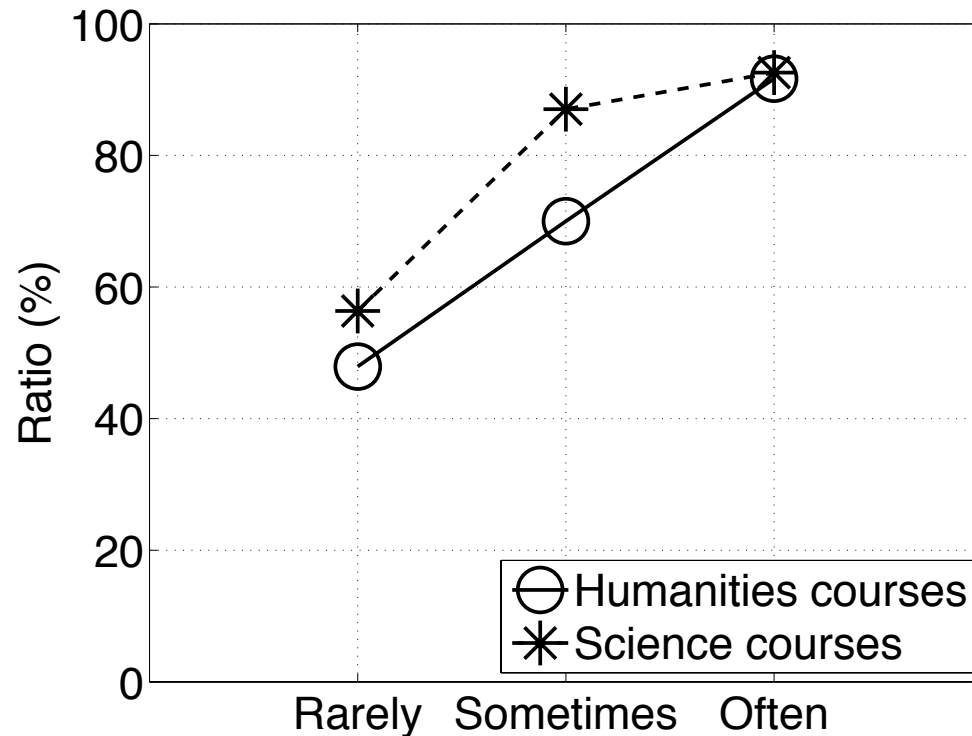


(b) 理系学生

図1：質問2(話しにくさを感じているか)に対する回答

文系は立川の調査とほぼ同じ， 理系は半数以上 7

# 質問3の結果



質問2と強い正の相関

- 文系 :  $R^2 = 1.00$
- 理系 :  $R^2 = 0.87$

話しにくさと明瞭度の  
関連を示唆

図2：質問3(聞き間違えられたり，聞き返されたりするか)に対する回答



## 質問4の結果(場面)

- ❖ 緊張すると上手く話せないという回答あり
- ❖ 早口で話す場合
- ❖ 話しにくい音節を具体的に挙げた回答あり
  - 自己の発話に対して分析的
- ❖ 「噛む」という表現を用いた回答多数
  - 言い間違い, 非流暢性
  - メディアによってより意識的になっているか

# 質問4の結果(場面)

- ❖ 早口で話す時
- ❖ 噛む
- ❖ 滑舌が悪い
- ❖ サ行が言いにくい
- ❖ ラ行が言いにくい
- ❖ 人前で話すとき
- ❖ タ行が言いにくい
- ❖ カ行が言いにくい

## 質問4の結果(感覚)

- ❖ 舌がもつれるような感覚
- ❖ 舌が絡まるような感覚
- ❖ 舌が回らないような感覚
- ❖ 舌がどもるような感覚(?)
- ❖ 頭と口の動きが合っていないような感覚
- ❖ 舌が詰まるような感覚
- ❖ 舌がもたつくような感覚
- ❖ 口の動きがついてこなくて、まるまるような感覚

# まとめ

- ❖ 約500名の学部生を対象にして話しにくさの自覚に関するアンケート調査を実施
- ❖ 文系学生では41%，理系学生で52%がある程度以上話しにくさを自覚
- ❖ 話しにくさを自覚する程度が大きい人ほど，聞き間違えられたり，聞き直されたりすることが他人より多いと感じている